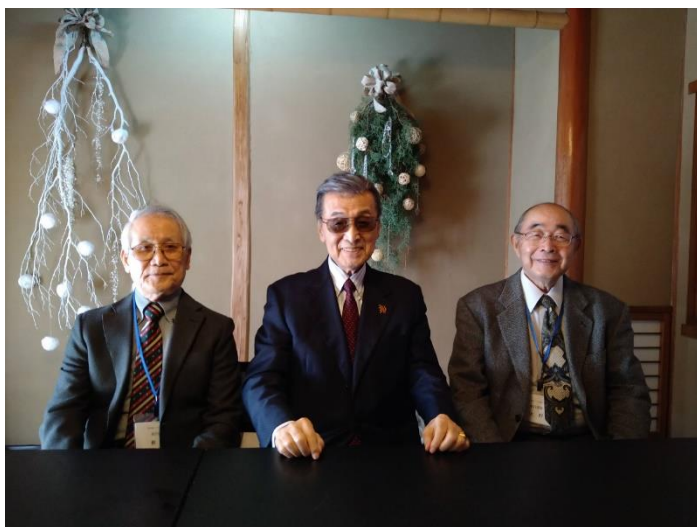


## 宝田明 特別講演会:「俳優として人間として、～満洲の歴史から平和を学ぶ～」

王希奇「一九四六」高知展実行委員会 大野正夫

体調に不安があると事前に連絡を受けていたが、昨年12月2日に、お元気な姿で来高知され安堵した。特別講演前にコロナが収まりつつあり、通常の200席の小ホールで行われた。当日は事前整理券を配り定員いっぱい入っていただいた。県外者には事前予約を受け付けた。多くは高齢者で、宝田氏の映画を見た方々であろう。皆さん、宝田さんのお話に感動を覚え、会場を笑いが出るエピソードも交えられたが、不戦の思いを多く持ったと思う。

当日、11時30分に、王希奇「一九四六」高知展実行委員会会長の柳井卓先生と私が、宝田さんと得月楼で昼食を共にした。柳井先生は中学1年生、私は5歳半ばで満洲から引揚げた。短い昼食の時間であったが、満洲の思い出を語られ、初めて主役に抜擢された「ゴジラ」について、「あれは反戦の映画なのですよ。水爆で海底から出てきて、最後は特製爆弾(水爆)で殺される」と語られた。「そう思って観てくれてはいませんがね」と微笑えまれた。



宝田さんは、父が鉄道関係の技術者で、南満洲鉄道(満鉄)ハルピン満鉄社宅に家族で住んだ。当時は日本政府の国策で満州への移民が行われて、ハルピンにもたくさんの日本人が暮らしていた。当時のハルピンは、ロシア人も多く住み、ロシア風の石造りの建物が多く美しい街であったと言われた。

得月楼にて、左より柳井卓、宝田明、大野正夫(敬称略)

宝田家は、中国人を招待することも多く、中国人、朝鮮人、蒙古人、ロシア人、日本人が協和する生活で、中国語を話す機会が多く、日々の生活のなかに五族が共存していた。いわゆるコスモポリタンになっていた。多様な少年期を多人種の入り乱れた大地で過ごしたことが、彼のおおらかで大陸的な気質のようなものが育ったと言われた。

11歳の時に終戦を迎えた。父の満鉄勤務がなくなって、家族の収入が途絶えて、家計は苦しくなったが、宝田さんには、敗戦は苦にならず、リンゴ箱を兵舎の門前に置き、「将校さん、靴を磨きませんか!」と、ロシア語で呼びかけ靴磨きをした。父は「そんなことをするな!」と嫌な顔をしつつも、黙認したそうである。彼は歌が好きであったので、知っているロシアの歌を磨きながら歌ったので繁盛したという。

社宅は駅の隣にあり、日本兵が次々と列車に載せられてソ連へ運ばれてゆくのが見

えた。よく見ようと構内のなかに入り、列車に近づいて行った。兵士達は手を振り、「帰れ！！」と合図をしたが、なお兵士達のところに近づいて行くと、監視のソ連兵にみつき、自動小銃を連射した。その中を逃げたが、腹に焼き火箸を当たったような痛みを感じた。薬は赤チンしかない。3日目には黄色い膿がでた。元軍医が治療にしてくれた。「これは弾を取りださねば、おかあさん、ハサミを焼いて持ってきてください！」と言い、ベッドの柵に両手、両足を縛り、カエルを裏返しにした形になった。消毒も麻酔もない。「明君、日本男児だろう。我慢しろ！」と言いつけて、ジョキ、ジョキと切り始め、うめきながらも、レバーが焼ける臭いを感じた。「おかあさん、これが弾ですよ」と、怒りをこめてつぶやきながら、鉛の弾をみせた。ソ連軍は国際法で禁じられている鉛の弾を使っていた。弾が腹膜で止まっていたので助かった。薬もなく赤十字のガーゼに赤チン塗ってあてるだけで、治るに3か月くらいかかった。75年たっても、切り口あたりに傷みを感じる時あると話された。

満洲から引き揚げ後、中学校では地元の子供達となじめなかったが、学校の演劇発表会に出させてもらい、演じることの面白さを知った。高校は都立豊島高校に進学したが、生活は苦しく、高校時代はいろいろなアルバイトをして、学費を稼いだそうだ。そんななかで演劇部に入った。演じている間は、“何か”、開放感があつたという。

高校3年になって、大学進学を考えて、受験勉強していた頃に、高校に学校行事に写真を撮りに来る写真館の中垣さんから、「東宝でニューフェイスを募集しているから、うけてみないか」と誘われた。「歌も歌えるし、受けてみろよ。落ちても、もともとじゃないか」という演劇部の仲間の声に後押しされて、ふと、受けてみようかということになった。中垣さんが校庭で3枚の写真を撮ってくれて、満洲から引き揚げてきたことなどのことを筆で書き、履歴書にそえた。演技テストと面接が終わっても返事が来ない。受験日がせまってきた。6か月過ぎて、諦めかけていた頃に合格通知がきた。赤鉛筆で書きこまれていた「蛍雪時代」と、その瞬間、おさばらであったと、微笑まれた。

研究所の訓練も終わらないうちに、役が決まった。それから、「ゴジラ」の主演に抜擢され、スター俳優へと飛躍していった。三船敏郎さんと森繁久弥さんは満洲を知っており、特に親しくなり、多くのことを学んだという。

宝田さんは、著書、宝田 明「送別歌」(コスモモリタンの流儀)ユニコ舎刊に、次のように書かれている。「日本国憲法の前文は、格調高く、平和を謳う文章です。俳優人生において、私は、与えられた役柄を演じることで、さまざまな人生を生きてきました。観て下さる方もいろいろです。また役になりきるためにも、私はあえてノンポリを通してきました。しかし、一方、年齢を重ねるごとに、「人間・宝田 明」として、子供時代の戦争体験が、いかに、人間形成や人生観に影響を及ぼしているか、また、それがいかに悲惨な事実であったかということ、あらためて考えなおすようになりました。そして実体験として語ることが、戦争を知らない世代に対して自分のできる役割であり、責任ではないか思いようになってきてのです。」

講演後、上記の本のサイン会があつた。宝田さんは、サイン後に、顔を見て丁寧に本を手渡され、記念撮影にもほほ笑みを持って応じていた。

宝田 明さんは、2022年3月14日に誤嚥性肺炎で急逝された。1934年4月29日生まれで、88歳になられる直前の事であった。亡くなられる3日前、ご自分が出られる

映画の上映挨拶の壇上で、「これからは裏方の仕事をする」と語られたという。宝田さんは、越後国村上藩藩士の末裔と、ご自身から語られ、華やかさのなかに絶えず武士道を意識された人生であったように思われる。